新作能謡

罔象女（みづはのめ）の神

登場人物

貴船明神
水質保全學者
水質保全役人
罔象の女の神

謡　〽仰ぎ來たりし嶺の富士仰ぎ来たりし嶺の富士忍野の水の清しき

役人「我は、湧水の調べごと專らにする忍野わたりの監査の役人なり。
古川に水絶えざるの理り、確かめんと」

謡　〽冬靄たちて裸木の　根を隠しぬて嚴寒の冷風渡る七つ池、茜の空の晴れゆきてやうやうに
富士の嶺の廣く圀士に望みし早朝

役人「秋津洲根の一葦の水とて疎（おろそ）かにせじとて調べゆくなり。」

学者「我が惑星は九割八分が水也。内、淡水は二分なれば世界に名だたる富士山の、熔岩流下の
湧水の整備供給を心ざし、水質保全に餘念なし。三保の松原過ぎ越して三嶋大社に、
大山祇命（おほやまづみのみこと）、積羽八重事代主神（せきはやへことしろぬしのかみ）鎮座ましまするを拜み、八幡神社に應神天皇、神功皇后を拜し
はべり、淺間神社に木の花咲くやひめを拜みはべりて富士の景勝心ゆくまで嘆じ來たれ
り。湧水清く豐かなることこの上もなし。」

學者「柿田川をたづねゆくに樹林續きて山路にふかく芽生（みしやう）の生れたれば。」

役人「浴する如（ごと）深く息を吸ひ來たる」

學者「濤々たる眞清水」

役人「水なるが良き。眞清水唯に良き」

學者「かつて、山中の清水流るる川の邊に、鹽水（しほみづ）湧ける不思議見し事あり」

役人「天の橋立の磯清水、海中の島なれど、鹽味含まぬ眞水ぞふしぎ。」

學者「安藝の嚴島神社の眞清水」

役人「秩父の一杯水の冷（れい）」

學者「水の冷を言ふなれば、摩周湖の水は八度で定まる」

役人「笛吹の藤代の瀧十二度変へざり」

役人「此處、柿田川の湧水は十五度保つ」

學者「山梨の奈良王神社の御府水は考謙天皇御遷居縁起抄に病に功ある硯水とあり。」
役人「あな、こなたに出ますは何方様にやあるらん」
貴船の神「長生の水あまたあり。西へ飛べば菊池川の神の水、鳥海山麓の寵の伏流水、恐山の長生水、南に西に奔り奔流となる白き水、不動の滝の洲の水。」
（湧水の崖の邊に御社あり。貴船の御神を祀る。）
謠「〽木漏れ日の陽矢の班を土壌は吸ひて、清しさ盡きざる水の源、雜木に交はす神の精靈はあるかなきかの彩に出て、芯つよかりし冬の芽に微けくも物の気配、森の岩尾の尖りありて水音密かに生まれゐて
役人「さては貴船の御神様にてあり給ふや」
貴船の神「富士の嶺よりの深谷の遍に流れし水を汲みたり」
役人「如何にか尊き御身明かされ候」
貴船の神「我こそは貴船の神、闇龗なり。古來雨を降らし、日照りより、人草守り來して尊崇一身に集め來たりしなり」
役人「などてか東へ西へ自在の働き」
貴船の神「月讀の白く殘りし西つ方、語る興あり。月宮の誘ふ語り時。我、此處に在りては、彼方へ渡り、世に知らぬ囹邑、黄土なし」
役人「波濤を越えし物語、御聞かせ給ひ候らはずや」
謠「〽漢土の、黄河を遡り渭水をゆきて古代の都、漢隋唐の御寺の、井筒より味はふ清らの眞清水、又、然る季、大庾嶺の、嶺風届く青空の高みに並める分水嶺に滴る禪の眞清水を汲み、行きゆきて天下第一泉とて長江の蕉山の聖泉の水、取り持ちて、掩茶の椀に喫しにき。又、天台山に滔々と流れたる岩肌に透くる水尊くも汲みたり、又、然るとき、西に行き、ヒマラヤよりの恒河の、蒼生の無音の齋戒に、聖水の流れの水音響き繼げるを崇敬止まらざりし御景とて見しことあり。インド、ペルシャの五弦琵琶、樂を辿ればチグリス、ユーフラテス、青き流れの源を、ネムルート峯より見下ろすや、村落のたぎつ瀬の清く冷たき、村人の誇りと成せる水
貴船の神「心ゆくまで、喫し堪能せり。」
謠「〽奔り行き、アフリカの赤きテントに貴重なる、
貴船の神「大陸の、玉水を、美しきグラスに飯み御含み來たりしなり。」
役人「御神尊し。明神なりて女神なる地の果て行ける水神様なる。」
學者「奇しき御神さまにてあり給ふ」

貴船の神「いや、罔象の御女神あり。宙(そら)の際(きは)にも通はるる崇高なる水神なりて清濁合はせ、宇宙の眞理具有し給ふ。」

學者　「罔象の御女神様の御事語りたまはり候ふや」

貴船の神「罔象の御神とは。無垢なる水も、思へば、草草の人の軀を經ては汚水汚物となる自然の攝理を、又宇宙萬物の清き始源と混沌汚濁の理りをも、萬世なる玉珠の内の宿命なりとて、そを我が事と切に受けとめんとて、生れし御神なり」

役人「罔象の女の御神様のお能(はたら)き、貴くぞあり給ふ。」

貴船の神「罔象の女の御神、多(さは)に、神庭(かんば)を作り給ふ。」

謠　〽宮内の、麗(うら)らの座の曲水の宴、白鳥も嬉々として律呂の調べに和(なご)みたる　春のせせらぎの刹那の御刻。白き手のして樂しみ給ふ

貴船の神「罔象の女の神に御愼意あり。」

貴船の神「富士より注ぐ樂壽園の今の世の地下水枯らす御事、御神怒りて、夕轟(ゆふとどろき)の後、豪雨を降らし溢れさせしめ給ふ。」

役人「今に、水退かず。」

貴船の神「然る季、此処、柿田川の流れ、排水に汚泥と化すときあり。」

役人「高度経済成長の工場排水のことなり候ふや。」

貴船の神「水さへ朽ちるありさまに罔象の御神、眞雷(しんらい)となり、音となり、水の汚れを我が事と稲妻（稲つるび）の曲りに、私かに、狂はれし御候事　聞きはべりしことあり。」

役人「ま、まうしはべり候。いま川は淨化され此處なる水、麗峰を背に今や一日百二十万トンの清水湧き、東洋一を誇り清水町、沼津市、三島市、熱海市、函南町に供給し候。飲み水として活用せられたる御事畏みて奏じ上げ奉り候。氷雪水、今や人草の飲み水なりて候。」

貴船の神「御神、自淨の報身なれば民の智の機(はたら)き、攝理のうちに深奥に、成り立たしめん」

貴船の神「御神觸るる事叶はじ。陽炎、稲妻の如(ごと)。影の如、御姿拜すれども近づきたれども捉へる 事御叶はじ。」

貴船の神「御神、虹の邊に立つ事あり給ふ。」

謠　〽慕情つのりて虹を待ち、朝日の暈(かさ)の翳(かげ)を求むらん

而してこの御時、

富士の裾野の廣がりの、緑樹茂れる湖を背に清明發し、はれの褻(け)立ちぬ。

貴船の神「鳥笙(てうしやう)の、律呂適へば時を得て瞬時のみ御影見はべること能ふべし」。

謠「朝霧の明け　富士の裾野の八海は盡くる事なく打つ波の　白嶺を映し鳥笙の妙なる律呂の祝ぎの常磐に鳴りて、霓裳羽衣の高き調べ。
三光を唱へし梢の蓬莱鳥、梢に高く春を呼び　律の高まり悠揚に女神の來臨告げ來たり。
俄かに開く花の下　典雅の裝ひ威光の扇

學者「湖を光して依り來る御影。」
貴船の神「あれなり罔象の御神の御立ち姿、女象なり給ふ。」

罔象女神「林巒の溜めし氷雪、太古の水。」
役人「水の靈なるか水に映りしは」
學者「幽魂なるや。」
罔象女神「朝霧は我が身なれども。」
役人「罔象の御神様、御老體なるや、白銀の垂髪なる。」
貴船の神「白髪と言はず明けの月消ゆる間の御姿なればなり。」
學者「白き千歳の面ざしの床しき。」
貴船の神「水清き所常に罔象の神あり。」
役人「不思議やかく言ひつるに若やぎし御女神となられ給ふ。」
學者「彩雲の彼方の玉殿より御出で給ふや」
貴船の神「神々の守護承け給ひ罔象乙女の水に遊み、祈りをられし、唯我獨尊の御象」
學者「罔象の御女神さまなり。」

學者「恐れ多くも尊かる罔象女神様に御伺ひ申し上げたき御事あり。愚生、學び惱めるは世に海あり川あり湖あるも無常の現世なれば久しく絶えせぬ水を望めるも不憫にして、涸るることあるや如何。」
象罔女神「人は無常を唱へしも罔象に無常も有常もなければ。」
學者「罔象の御神様に。」
罔象女神「あれに色無く形無く時無く法なし不生不滅。悠久の使命もちし、永遠の神なればなり。」
學者「罔象の女神様、蒼生に水無くば如何なされ給ひ候や。」
罔象女神「秀千峰より霧を聚め一陣の風とならん。谷川の瀑の微音に雲生むや枯野に搖らぎ、乾坤一雨風雲強め、冷冷と、豪雨となりて大地に灌ぐ。」
役人「神様なればかかるさまのはげしかる。」

謡　〝巖も流すたぎつ瀬の瀧のしぶきも轟々と
貴船の神「水を弄して簫鼓響かせ給ひければ。」
謡　〝水こそものの始まりと　罔象の女神、貴船の神、現象自在の大力發し無量の境現して、絶
えず清げに涌く水に、洲の敎へを滔々と、久遠の天地、瑞穂の州に、豐けく喜雨をそそが
れん。

罔象の女神の無量の御姿、樹海のほとりの泉邊に、千秋變はらぬ富士の秀の、滴り御袖に
うけ給ひ舞の御扇をかかげらる
今や、その時
電光の閃きの如き刹那の一瞬（碧巖録）
彼のとき貴船樓閣七彩に　現じきたれば、
金銀寶玉虛空に輝り
極樂の　池中に開くは大輪の、車輪の如き白蓮華
千早振る神の遊びか廣がる穹へ
虹霓ぞ、渡るや、一重三重なりて
罔象の女神の舞の袖　虹の織りなす飾光の
彼方へ透けて、消えにけり

平成二十二年五月　新作能〔弥都波能賣の神〕
富士の湖の邊にて、一曲を建立　安東　路翠

一葦の水（細き流れの水）
貴船の神社（祭神は、寵かみ（水を司る神）
罔象（水を支配する神）
律呂（律旋と呂旋）
稻つるび（稻の時期に多いので）稻光）
霓裝羽衣の調べ（月宮殿の天人の舞楽）
林巒（林に續く幾つもの山の峰）
唯我獨尊（釋尊の尊い孤高のお姿、あり方）
愼心身愼眞申請意（疎かにしない。愼みの心）
迅霆（激しい雷を押さへつける）
陰上（下腹、此処では全魂の存在する所

碧巖録（碧巖集、宋の圜悟克勤が、雪竇重顯の頌古に垂示、評、著語を行ひ、百則を解り易く説いたもの。佛道への教書。）

罔象の女神

水の神　始源の神、弥都波の女は「罔象」と、いふ字を當てられる神である。

罔象とは如何なる神様なのであらうか。

天武天皇の　勅により、集められた舊辞を、太安麻侶等が撰録、編纂を行ひ、神話、傳説、歌謠等により構成をなした〔古事記〕（神々の生成）には、伊耶那美の命のお生みになられた、三十五神の内のお一人が弥都波能女であると記されてゐる。

ものの始源の神、水の神は何故か女神である。

〔古事記〕の撰録に　係はった古代の傳承者、賸習者達は、高天原に天照大神を始祖と書かれ女神とされた。悠々承大御神は日の神であり稲の豊霊であり瑞穂の國の統治者である。

これについては、神功皇后以後、奈良朝に於ては女帝の世が續いてをり、そうした背景による影響を指摘されてもゐる。

が、しかし、縄文時代中期の、國に指定されてゐる米澤棚畑遺跡出土の土偶は、女を表現し、これは、女性の生命を育む能力に崇敬の念を抱いた古代の人々による、子孫の繁榮と、再生への祈りを込めて作られたものと言はれ、女體土偶は、既に我國各地に一萬二仟年前から制作されてゐたのであった。

女王（シャーマン）の王は吉野が原遺跡、妻木晩田遺跡（鳥取県）等に發堀されて居り、〔魏志倭人傳〕には、卑弥呼統治の女王國の存在、鏡を祭に用ゐる太陽を拜する女祭權者支配の邪馬國を中心とした連合國、の存在が記されてゐる。

太陽を崇める水田耕作時代、彌生時代以來の王朝確立以後、太陽神と、八百萬の神々は、王朝の始祖となって居られるのである。

罔象の女の神については、〔日本書紀〕（神代上四神出生）には、「伊邪那美命が美都波の女を生む」と書かれて居り「神武即位前記」には「嚴罔象」として限り無く清い水神である。

〔古事記〕にては、漢籍他あらゆる情報に詳しい安麻侶の關はりの中にあって、當然この神は、古代中國の雷神（キの神）の性格等も持ち合はせて居られるとされたと考へられる。

キの神とは、〔山海教〕に「日月の輝きを發光し、聲、雷の如し」と書かれる神で、音樂神であり、雷神でもある。

〔説文〕にては「龍の如くして一足」と記されてゐる。

又、罔象の女は、〔名義抄〕には「みづは」と書かれ、水の神であると同時に、山川の精、木石の怪と解され姿は無くとも古來より、水の邊に在つて祭祀が行はれてきた。

罔象は、ミヌマ、ミルマ、ミルメ〔ミは海藻〕と、類同する語で水神であり、後に貴船神社等の霊威ある母神となった。

罔象の女神に限らず、多くの神々が尿や汚物などよりの發想よる誕生をなされたことは宇宙開闢以後、

今日の宇宙生成、宇宙原理、混沌より秩序と調和へ向かふ宇宙規模の世界観を以てすれば、記紀編集をなした人々の、聖なる一掬の水も人の肉體を通した果ての結果や、更に「汚泥より清水へ」という神の理念と人類の知恵による地球浄化への永遠の課題が、確実に盛り込まれてゐたのであった。

罔は、（暗い、無い）〔論語〕〔漢書〕、又、冂（けい）には（遙かに遠いさま）の意があり亡には（隱れて見えない）の意があり、更に、罔象の女神は、雷神の性格も負ひ持ち、當然キの神の特徴を具へ五體不備となされてゐる。 水の神、ものの始源の尊い神になぜかくも、不備を言ふのであろうか。

これは、古來、我が國では、異郷、他界からの來訪者や尋常でない肉體の特徴について崇める風習があったためであると思はれる。

その爲、神主等は植物で目を潰す事もあったと言はれ、熊本縣の松坂古墳發掘の巫女と思はれる女性は人工的に、顔を變形されてをり、これは、苛酷ではあるが渡来神の習慣も踏まへた當時の風習である事が結論づけられてゐる。

更に、まらうどの饗應は美徳であり、福慈と筑波の神の物語は今に傳へられてゐる。

湧水の絶えない秋津嶋瑞穂の國、ここに、罔象の女神を思ふ時、誰しもが、清らかな水を心に描くのではないであらうか。

次第に鮮明に象を顯はされる罔象の女神。

古代の人々の水への思ひは傳へられ、罔象の神は、人の生活に密着し、山川草木の中に端然と存在し、輕やかに重要な位置をしめて在られる。

人にあっては肉體魂魄の真髄に存在し、絶えせぬ生命力をもって神の行爲を行って居られる。

自らは潜み、貴船の神に現實を委ね託す御神。

不垢不淨の不生不滅の女神はこの上なき完璧な眞理をもって叡智の結集により生み出されて居られたのであった。

経済發展の頂にある現代社會に於いて、この宇宙規模で考へられ自然の攝理全てに通暁した神の存在の在り方に感銘を深めると共に、宇宙形成の原理から考察すれば、清水から汚泥に至る水の循環は輪廻の一環であり、であらばそれを、清浄な水に戻す事が人の叡知であり神よりの使命なのである。

地球規模の使命を女神は見守って居られた。